

はじめに

川崎市は、副都心新百合ヶ丘を芸術の街と位置づけ施策を進めています。日本映画学校、昭和音楽大学の誘致、万福寺のアートセンター開設などによって、音楽・映画・演劇の分野において芸術的環境が整いつつあることは、喜ばしいことです。

しかしながら、芸術の中で美術・工芸の分野の環境は、どうでしょうか。大変残念なことです。この地域において、同じ芸術でも美術は音楽や映画に比べあまり高く見られていないようです。公共的な美術館が全くないのです。中村正義美術館、山田美術館など私的な美術館はありますが、良質な美術鑑賞のための場を与える公共的なスペースがありません。かろうじて麻生市民館の1Fに設けられた麻生市民ギャラリーがあるのみです。ましてや、区内在住の美術家に良好な発表の場もありません。この小文では、私ども麻生区美術家協会の活動を中心に美術家の活動を紹介しながら、この地域に公共の美術館、あるいは、ギャラリーを設置することの必要性を述べたいと思います。

麻生区美術家協会の誕生

麻生区には、洋画・日本画・工芸など多くのジャンルにわたって多くの美術家が在住しています。川崎市の中で、区内在住の美術家が会派を超えて自主的に協会を作って活動しているのは、麻生区だけです。それが、麻生区美術家協会です。

この会は、1985年麻生市民館にギャラリーがオープンした際に、区の呼びかけで、麻生区在住の専門美術家が集まって「麻生文化センター開館記念 麻生区在住作家絵画展」(1985年7月5日-14日)を開催したのが最初でした。日本画家12名、洋画家18名の計30名が出品しました。その後、この絵画展に参加した美術家に呼びかけ、23名の賛同を得て1985年9月に設立したのが、麻生区美術家協会でした。表1に掲げるように、公募団体に所属する美術家の他、団体に所属せず独立して活動している美術家によびかけ、会派を超えたメンバーが集まりました。発足時の中心メンバーは、代表を務めた安喰虎雄氏(春陽会)、事務局長を務めた海老原富夫氏(日本美術会)のほか、山田茂人氏(光風会)、杵淵やすお氏(現代童画会)、渡辺洋氏(日展)らでした。

文化勲章級の超有名美術家が入っていないではないかという指摘もありますが、有名画家の名声に乗っかってやる活動では長続きしないでしょう。23年間も続いてきたのは、ボランティア精神で、自発的に協力し合って展覧会を運営する気持ちを共有する美術家が結集したからに他なりません。

麻生区美術家協会展・グループ展

表1 発足当時の麻生区美術家協会メンバー

氏名	所属団体	種別
安喰 虎雄	春陽会	洋画
岩田 哲男	日本美術家連盟	洋画
海老原富夫	日本美術会	洋画
小沢勇寿郎	亜細亜現代美術展	洋画
尾田久美子	日本南画院	日本画
杵淵やすお	現代童画会	洋画
後藤 和信	日本美術院	日本画
小松 澄佳	日本美術院	日本画
近藤 恵得	東光会	洋画
桜井 利雅	無所属	洋画
佐藤 勝昭	日府展	洋画
立原 廣雄	現代美術家協会	洋画
佐藤多喜子	白亜会	洋画
田中 保	日本美術会	洋画
田中 信子	無所属	日本画
谷口 健雄	出版美術家連盟	洋画
鶴見 幸子	創作画人会	日本画
根本 清満	一線美術会	洋画
土生 一信	日本美術院	日本画
安富 信也	国画会	洋画
矢野 素直	春陽会	洋画
山田 茂人	光風会	洋画
渡辺 洋	日展	日本画

¹ 洋画家：社団法人日本画府(日府展)洋画部常務理事、東京農工大学名誉教授(前副学長)

本協会は、発足以来毎年、「あさお区民まつり」に協賛して、専門家による質の高い美術展、「麻生区美術家協会展」を麻生文化センター市民ギャラリーにおいて開催してきました。第1回は、発足の年の1985年10月11～16日でした。本年、第23回展を10月12～14日に開催しました。

1889年には、当時の文化センター細川館長の特別の計らいで、市民ギャラリーにおいて美術家協会のメンバーの数名ずつでグループを作ってグループ展を年に計5回開催することができました。美術家たちは、競って、力の入った大作を出品し、互いに批評し合ったり、「シンポジウム」と称するギャラリートークで市民に作画意図を伝えたりしました。みんな若かったし、他流試合がメンバーの創作意欲を刺激しました。本会が最も充実していた時期かもしれません。

その後、「特定の団体がギャラリーを独占するのは如何なものか」という一部市民からの圧力があり、このような企画は続けることができなくなりました。美術家の作品発表を、絵画教室の作品発表会と同じ次元で捉えられたのにはがっかりしましたが、逆の立場に立てば、市民の美術作品発表の場がないということの裏返しなのでした。

1989年には、当時、新百合ヶ丘駅北口にオープンしたエスプレス画廊での展覧会(10月9-15日)も開催されました。この頃、毎年、年末または年始にギャラリー華沙里で小品展が行われました。発表の場があれば、いつでも参加する雰囲気がありました。

1990年、新百合21(トゥエンティワン)が竣工、1Fに新百合21ホールという多目的ホールが出来ました。川崎市生涯教育振興事業団が設立され、その記念展が1991年1月28～30日に開催されました。麻生区美術家協会ではこれに全面的に協力、1F大ホールの半分と1Fロビーを使って、多数の衝立パネルを立てて、1名あたり3-4mの壁面割当てで美術展を開催しました。21名の会員が参加、84点の展示がありました。

しかし、衝立パネルに100号など大きな作品を吊すことは大変な困難があり、しかも、舞台用の照明しかない状態では、作品にスポットライトを当てることも出来ず、採光は惨めなもので、美術家の評価結果は散々でした。多目的ホールで美術展示をすることの限界を感じました。また、1991年11月8-10日には、「芸術の街構想」発足記念シンポジウムにともなうイベントとして、同じ1F大ホールで展覧会が開催され、美術家協会も1人1点10号程度を出品しました。

麻生区文化協会野外写生会への協力

麻生区美術家協会は、麻生区文化協会加盟団体として、文化協会(美術工芸部会)の行事である野外写生会やデッサン会に指導者として協力してきました。野外写生会は、柿生・修広寺付近(1987)、細山・香林寺周辺(1988)、麻生文化センター周辺(1989)、黒川・柿小分校付近(1990)、ヨネッティ付近(1991)、岡上の東光院周辺(1992)、などで開催されました。

写生会は、天候に左右されることが多く、参加者数が当日までわからないことや、雨天の際の集合場所の確保などの問題もあり、最近は行われていません。



図1 東光院での野外写生会風景

麻生区文化協会人物デッサン会への協力

1985年に人物デッサン会が始まりました。美術家協会の美術家が、デッサン指導にあたってきました。当初はモデルさんと呼んでのデッサン会でしたが、1986年からは、麻生区黒川に稽古場をもつ劇団民藝の美術部のご協力により、「舞台衣装の女優さんを描く会」が開始し、本年で23回目を迎えています。例えば、民藝の舞台公演「アンネの日記」に合わせて、アンネフランクやその姉のマルゴーフランクの衣装でポーズをとってもらいました。

このような活動ができるのは、麻生区ならではのことで、デッサン会参加者は50名以上、その年齢は若者から90歳の高齢者まで、多岐にわたっています。また、毎年来てくださるリピーター参加者も多く、年々上達していく様子も見られ、指導に当たる私たちもやりがいを感じています。



図2 民藝の女優さんをモデルにデッサン会

表2 麻生区美術家協会作家展(1989年)

会期	出品者
第1回 4月28日-5月3日	安喰虎雄(春陽会)、石田茂嗣(光風会)、海老原富夫(日本美術会)、桜井利雅(無所属)、谷口健雄(出版美術家協会)
第2回 5月26日-5月30日	尾田久美子(日本南画院)、小松澄佳(院展)、松田圭子(現代水墨画協会)、渡辺洋(日展・日本画)
第3回 6月23日-6月29日	板垣千鶴子(無所属)、佐藤多喜子(白亜会)、田中保(日本美術会)、鶴見幸子(創作画人協会)、白木博也(日本美術会)
第4回 7月28日-8月2日	小沢勇寿郎(サロントウキョウ)、杵渕やすお(現代童画会)、佐藤勝昭(日府展)、立原廣雄(現代美術家協会)、矢野素直(春陽会)

区民展覧会の思い出

1989年11月3-5日には、文化協会の文化祭の機会に、写生講習会の参加者に呼びかけ区民展覧会が開催されました。出品作の中から美術家協会の会員が審査員となって優秀作を選んで表彰しました。多数の出品がありました。表彰式も行い、行事自身は成功したと言えるのですが、展示スペースが足りず、市民会の会議室やオープンスペースなどを総動員しましたが、条件の悪いところに展示された出品者からはブーイングがありました。この企画はその労力の大変さと展示スペースの問題から、その後継続されませんでした。

また、人物デッサン会での作品を一同に集めて展示する展覧会に対する要望も強いのですが、展示スペースの確保や、お世話することの大変さから、開催出来ていません。

麻生区に本格的美術館を

麻生区文化センターに市民ギャラリーがオープンしたのは1985年でした。当初の計画段階から参画しておられた海老原富夫先生によると、設計段階では、美術家の意見を反映したギャラリーを設置する

方向での役所の努力が見られたそうです。設計段階ではかなり広いスペースが確保され、外光も直接入らない設計になっていました。

ところが、蓋を開けてみると、なんと、文化センター裏側に、大きなへこみができギャラリーの面積は大幅に縮小されるとともに、形状も一部に斜めの部分ができ、そこがガラス張りになって外光が入るといって極めて不適切なものになってしまいました。何度かの申し入れの末、ようやくガラスに遮光シートが貼られ、外光の影響は多少減りましたが、ギャラリーというよりは廊下の延長で、単なる展示スペースという感じの使い勝手の悪いものです。



図3 あさお市民ギャラリー（2007年度文化祭における文化協会美術工芸部の展示）

天井の高さの割には照明設備が貧弱ですし、壁面に作品名のラベルを貼ることも禁じられ（通常の画廊では、ボードに虫ピンで作品名のカードを止めますが、壁面がハードなのでピンが使えないのです）、かなり使い勝手の悪い展示スペースです。それでも、麻生区においては一番すぐれた公共ギャラリーなのです。

会議室は有料なのに、このギャラリーは無料です。無料であることは一見有り難いのですが、その結果メンテナンスが不十分になるようでしたら、本末転倒ではないでしょうか。美術家は作品発表で勝負しているのであり、多少の費用を払ってでも発表のスペースが欲しいのです。現在の市民ギャラリーは、そのような

要望に応えるものではありません。専門家による質の高い美術作品発表の場を提供することは、とりもなまわず、市民に良質の芸術鑑賞の場を提供していることになるのです。この点は、音楽や舞台芸術と共通のことです。

もちろん、一般市民が比較的安い費用で作品を展示できるスペースの確保も必要です。絵画教室の作品発表などは順番待ち状態で、2年に1度しか出来ないなどニーズに応えることができていないのが現状です。特に、昨今の団塊世代の退職により、公共の美術展示スペースに対する市民諸団体の要望はますます強くなっています。

本年発足するアートセンターも多目的スペースになりました。当初は、美術展示も考えられていたようで、美術家も書道家も大変期待しておりました。しかし、結局は映画と舞台芸術に限られたようです。なまじっか、多目的で使い勝手の悪い美術展示スペースはごめんですが、期待していただけに、またも、美術関係はおいてきぼりにされたという気持ちです。

はじめに述べた1989年頃の美術家協会の活動に示されたように、ちゃんとした美術館さえあれば、美術家達は競って作品を展示するはずなのです。ぜひ、麻生区に芸術の街に相応しい本格的な美術館を作っていただきたいと強く要望する次第です。